

昭和47年度
(1972)
第12回大会

男子優勝 札幌南 女子優勝 札幌西

【 専門委員長 寸評 】

当番学校長を中心に関係諸先生の熱意と道連盟の積極的な協力により、立派な大会に終了したことにまず感謝したい。

男子団体戦決勝は順当に勝ち進んだ札幌南に対して、優勝候補の一つと思われた札幌東を破って進出した地元当番校の小樽潮陵高校が対戦。好調潮陵は善戦するも伝統と根性の札幌南に軍配上がり2連勝する。

一方女子は予想通り札幌勢の対戦となったが、ダブルスとシングルスにそれぞれポイントゲッターを持つ札幌西が接戦の末勝利を収め、初優勝する。

個人戦男子シングルス決勝は、第1シードで走って拾いまくり相手の虚をつく頭脳プレーの石見と、第2シードで強打とネットプレーを主体とする攻撃的テニスが持ち味の西田という対照的なプレーヤーの対戦となった。試合は一進一退のゲーム展開となり、ファイナルセットのファイナルゲームもジュースを繰り返した末、石見が枯り勝ちした。

女子シングルスは札幌静修同士の決勝となったが、1試合ごとに自信をつけ調子を上げて来た無欲のノーシード谷江が逆転優勝をさらったが、カのある井上には一工夫欲しかった。なお谷江と接戦のうえ敗れはしたが、第2シード佐々木を破り代表決定戦にも勝った2年生の奥田の今後に大きな期待をかけた。

男子ダブルスは、第1シード札幌ペアが徐々に調子を上げ、最終セットは渡辺の頭脳的な配球と酒田の思い切ったスマッシュで逆転勝ちする。光星ペアはリードしてから守りのテニスをして自滅した格好である。

女子ダブルスは、過去数回の優勝経験を持つ札幌西ペアの自信の前に、札幌南ペアも善戦したが、後衛で強打の高橋、ネットプレーの篠原というパターンで札幌西ペアを崩すに至らず。各試合の上位に札幌勢が進出していたが、北海道のレベルアップのために地方勢の奮起を是非期待したいものである。その一環として来年度は指導者の講習会を実現するべく努力中である。その際は是非参加して下さいようこの稿を借りてお願い申し上げます。

【全国大会】

団体の部、男子札幌南は大いに健闘し、2回戦進出を果たしたが、国体開催で強化に力を入れる鹿児島に完敗。女子の札幌西は最近にない好選手を揃えて2回戦進出を期待されたが、他県交流のない悲しさか、雰囲気にも飲まれて惜敗す。個人の部は男子シングルス山本（札幌東）佐藤（光星）ダブルス渡辺・酒田（札幌西）、女子シングルの井上（静修）等が2回戦進出を果たすも以後の進出ならず。各選手の試合をここに分析すると、接戦を演じながら惜敗のケースが多い。毎年のごとく同じことを繰り返す北海道テニスの敗因は何か？選手も指導者も十分な反省と対策を考えて1年も早く陽の目を見たいものである。特に女子の場合はテニス以前の足を作らなければならないことを痛感した。

（専門委員長 千葉 邦嗣）

優勝のよろこび

男子 札幌南高等学校

今思い出すと、「優勝するのは南高と初めから決まっていた。」などと冗談も言えるが、当初は、蓋をあけてみなければ優勝の行方はどうなるかまったくわからないという状態であった。全道大会とはいうが、実際は庭球を行う全高校の半数以上を占める札幌地区からの出場校が優勝するのは、ほぼ確実的であったのである。

ところで、インターハイの前に2度の団体戦がある秋季リーグ戦と春季リーグ戦である。秋季リーグは、いわゆる新人戦であるが次シーズンの優勝を占うべく最初の大会である。しかし、この大会で我が校は東高に敗れ、3位にとどまり、そしてさらに翌年の春季リーグでも光星高に敗れてしまい、全道への道のりに大きな亀裂が生じたのである。

このようなわけで、クラブの雰囲気も、なんとなくみだれかけたが、そんな時、われわれの足場となり、そして一明の光を投げかけてくれたのが、おおくの先輩たちであった。今考えてみると、あの良き先輩たちのおかげで、全道優勝の栄誉を手にすることができたといっても決して過言ではないと思う。

ところで、秋季で敗れた我が校が、全道大会で勝利を勝ち得るには、まず、地区予選で優勝しないことには話しにならなかった。しかし、たとえ、そうなったとしても、全道大会で予選のときに勝った相手とやって、再び勝てる保障はどこにもなかったのである。現在、高校生の参加する試合はいろいろある。中でも国体やジュニアは規模も大きなものである。しかし、これは個人戦であり個人としてやっている者が目標とすべきであろう。われわれクラブ活動としてテニスをやっている者にとっては最大の目標とすべきものは、クラブ員全員の団結によって、初めて勝ち得る事のできる団体戦、そして、その頂点にあるインターハイだと信ずる。この意味からしても、今回の全道優勝は、我が南高にテニス部にとって、たとえようもなく喜ばしいことである。同時にこの感激を、今後のつらい練習の原動力として、当然、全道3年連続制覇へとつないでゆきたい。そして、いつしか実るであろう全国制覇へと…。

最後に、勝利の影で、地道に協力してくれた後輩に感謝すると同時に、スポーツを続けることのつらさ、きびしさを少しでも早くわかってもらいたい。そして勝利の栄光を信じ

て、ひたすら努力することを信じてやまない。

優勝のよろこび

女子 札幌西高等学校

6月17、18日、小樽入船コート。前日から明け方にかけて雨が降り、どんよりした空模様の中で、予定より遅れて試合は始まった。

他校との間に殺気がみなぎる中、決勝は行われた。“どうしても負けられない。絶対勝つんだ”そういう精神がわれら6人を支配していた。先輩が応援にきてくれたのも非常に励ましになった。しかし勝ったときの喜びは、さほど感激的なものではなかった。引き続きすぐに個人戦があったからであろうか。自分に「ついにやったんだ。全国へ行けるんだ。」そう言い聞かせてから、耐え切れない喜びと実感がわいてきた。

思えば苦しい長い月日だった。入部した時顧問の先生に「参加するだけではだめだ。試合する限りは勝て！！」そう言われてから早3年になろうとしている。負けるみじめさを十分に知っているからこそ、また本当にテニスが好きだからこそ、つらい練習も決してつらいと思っことはなかった。かえって練習というと一目散にコートに飛んで行ったわれわれだ。黙認のうちに全道制覇を目標とし、いろいろな困難にぶつかって何度やめようと思ったか分からない中でも、励まし合い、3年間やりとうした。全道制覇の栄光を勝ちとったわれわれはラッキーだったのかも知れない。

環境整備の整っている西校は他校から見るとうらやましい存在であり、優勝するのは当然のように見えるかも知れない。が、そこには部員一人一人の努力、顧問の先生の努力と温かい心、先輩の期待、そして伝統などがあるのだ。われわれの作った歴史もまた後輩の背中に重くのしかかるかもしれない。しかしわれわれの中に宿っていたような根性、テニスに対する情熱を引きついで、自己との戦いに勝ち抜いてほしいと思う。

全国高校総体（第62回全国高等学校庭球選手権大会） 福島

8月2日～8日 いわき市平庭球場 平工業高校テニスコート